

泉州看護専門学校

○2024年度「自己点検・自己評価」

カテゴリー	現状と課題・解決方法	学校関係者委員よりのご意見
教育理念・教育目的・教育目標	本校のカリキュラムは、人々の基本的人権尊重の理念に基づき、自主的・民主的で人間性豊かな看護師の育成を目指しており、卒業時には、看護実践能力に必要な専門的知識・技術を身につけ、集団の中で誠実に学び続ける人格を育成できるよう編成している。看護の専門職者として求められる専門知識・技術・技能を身につける前提として、感性豊かで人権思想に裏付けられた科学的な人間観・健康観と集団の中での人材育成や仲間意識を重視している。さらに、設置主体である法人の医療観（綱領）に基づき、対象を生活と労働の場で歴史的に捉えることを核としている。 集団の中で創造性を発揮し、主体性・協調性・社会性・民主性を養うために、講義および教科外活動において、集団で話し合う機会を多く持つようにしている。 本校は、これまで全学合宿・学院祭・創作曲発表会といった行事を学生主体で実行委員会形式で行うことにより、自主性・民主性・集団性を高める取り組みとして、教育の柱として取り組んできた。コロナ禍以降各行事は縮小した形となり、合宿も7月に「泉州夏祭り」に変更して行ってきたが、2024年度5年ぶりに全学合宿を実施することが出来た。3学年とも合宿を経験したことのない学生が行事をすすめることとなり、イメージがない中で実行委員会や係会議をおこなうことの困難さはあったが、学生が合宿を楽しみにし、教員が支援しながら縦割りの会議を重ね、当日を迎えることとなった。時間を守ることや集団で活動することにおいての規律など課題も見られたが、学生それぞれが役割を果たし、何よりも楽しく合宿を行うことが出来た。その後、学院祭・創作曲発表会等、行事をすすめる中で学生の成長が見られた。一つの行事を作り上げる為には、係会議や実行委員会といった3学年での討議や準備をすすめる中で、自分の意見を相手に伝えること、また、相手の意見や思いを受け止めること、さらには意見が相違する中で、折り合いをつけながら意見をまとめていくことが必要となる。これらを繰り返す行うことで、自主性・民主性・集団性を高める機会になっていると考える。 また、行事だけでなく学習においても、縦割での取り組みを行った。1・2回生合同での解剖生理学の学習、2回生が主体となって健康教育を1回生に実施するなど、学年を超えた学習スタイルにより、学生のモチベーションを高め、学習の深まりにつながったと考える。 本校の実習施設のほとんど（保育所以外）が民医連の事業所である。教育理念・教育目標につながる医療観・看護観・人間観などを医療の実際場で学ぶことが出来ている。臨床地の指導者をはじめ他職種からも学ぶ機会が多くあり、学生の看護観を深めることにもつながっている。 学生を一人の人として尊重し、様々な課題があっても学生を信頼し、学生が安心して学べる学校環境を心がけている。安心できることが「甘え」につながり課題になることもあるため、学生と教職員との距離を程よく取りつつ、学生が心理的安全性を保ちながら成人として社会性を高め、成長出来るよう関わるのが重要と考える。	＊行事を行い際にプロセスを大切にしている点は評価できる。行事を通してのちの学習態度等にどのような変化があったのかについての評価も大切でないか

教育課程経営	本校は、民医連の綱領、法人の医療・看護の理念がもとになり、「無差別平等の医療」「患者の立場に立つ看護」が教育実践の軸になっている。 教育理念・教育目的・教育目標に沿って教育課程編成が行われているが、社会状況や社会のニーズは年々変化している。そのため、毎年、前期総括・後期総括を行い、その都度改善に努め、年度末総括では、来年度のカリキュラム内容に向けて検討をしている。その中で、外部講師の変更や講師団会議による意見、学生による授業評価などを参考にカリキュラム内容の変更も行っている。 学生の現状では、1回生の入学が22名となり講義や実技でも繰り返しの技術を体験でき充実して学ぶことができた。2回生、3回生は臨地実習を通して、看護観を深めることができています。 カリキュラムでは、地域に根ざした教育を学校独自のカリキュラムとして構成し、「地域」や「在宅」に焦点を当て、今年度も1回生が地域・在宅看護論の講義の一環として、病院の友の会等へ参加させていただいた。地域の方との交流を通して、地域で生活する人々のことや、そこにある医療施設の存在意義なども楽しく学ぶことが出来た取り組みとなった。この取り組みを、今後もさらに発展させていきたい。 拡大臨床指導者会議を開催し、この間の実習状況を臨床と教員で交流する場で、臨床実習の重要性を再確認する機会となった。日常の指導を行うなかで、学生の現状や関わり方、コロナ禍が学生に及ぼした影響なども交流し今後どのように指導者として関わるのが大切であるかを共有することが出来た。 臨床実習指導者講習会では、講習会のなかで、受講者と教員が学生指導について学びあう場となった。今回は、受講者に学生役、指導者役、患者役を決めロールプレイングを行ってもらい学生の立場に立った視点で指導者の役割を話し合うことができた。また看護観も発表し合い、大切にしている看護についてともに学びを深めることができた。今後どのような学生を育てたいのかを教員で話し合いをもち、学生とともに育っていける教育を大切にしたい。	* 講師団会議の中で、読解力や聞く力、文書作成能力の欠如などが日本語力の不足が指摘されていたが、その克服のために言語表現の授業など行われている。あわせて行っている算数の基礎的な力を育成する教育なども評価できる点ではないか * 講師団会議、その後の講師・教員向けの勉強会など内容前進している * 「他職種連携」のカリキュラムの更なる強化を * 学生による授業評価を客観的でさらに生かせる仕組みづくりの構築が必要
教授・学習・評価課程	学生への教育活動について、入学前にオリエンテーションを行った。入学前オリエンテーションでは、学則を含めた学校生活について、学生本人だけでなく保護者にも伝え学業支援をお願いしている。その後は、各学年の家族懇談および個人懇談を行い、必要時は家族と連携し学生への支援体制をとっている。今後も保護者から信頼されるような学校作りが必要である。 成績については、毎年4月に前年度の単位取得状況である成績表を学生および保護者に渡している。また、クラス懇談や個人懇談を実施し、学習状況を共有することが出来た。さらに、国家試験に向けての対策や現状なども情報共有し保護者と学校で共に学生を支える基盤づくりに努めている。再試験に向けては担任が入ったの学習会も行っているが、日常的な学習の強化をクラス集団としても個人学習としても取り組むなど、低学年からの学習支援が重要である。 今年度はコロナの影響での臨地実習制限はなくなり、精神看護学実習と母性看護学実習を含めてすべての領域での臨地実習ができるようになった。3回生は新カリキュラムでの実習となり、各領域実習は臨地8日、学内2日となった。小児看護学実習で、診療所での小児外来実習では、診療時間の関係で木曜日の午後の臨地実習ができず、半日を学内実習で対応した。次年度の小児外来実習は曜日変更を行い、全日臨地実習を行えるように調整できた。 コロナの感染対策も軽減し、食事介助・口腔ケア・入浴介助の基礎看護技術の臨地実習も経験することができた。 今年度も看護師国家試験対策は、学生のイメージを深めるような学習（補講等）を行ったが、基本的な解剖生理などを含めた補習講義を1月末まで実施、また心配な学生に対しては個別指導を行い関わった。班学習を行うことの困難さがあるが、これまで大事にしてきた集団での学習を臨機応変に行っていく必要がある。	* 「学び方」が分からない学生への支援大切

経営・管理課程	本校の管理運営にあたっては、組織図のもと、管理委員会、学校運営委員会を設置し、それぞれの任務および審議決定事項については規定されている。 管理委員会は1か月に1～2回、学校運営委員会は2か月に1回開催している。教務会議は1か月に2回定例会議を実施、必要に応じて臨時の管理会議や教務会議を行い、その都度の課題や学生対応に努めている。2024年度より、副教務主任を2名任命し、管理委員会体制の強化を図った。各学年会議には担任、副担任に教務主任もしくは副教務主任が入り、指導・相談にあたっている。臨地実習担当として実習調整者を配置し、実習にかかる全般を担っている。 非常勤講師にお集まり頂き、教育方針について討議を行う「講師団会議」を3月に実施、学生の特徴や課題を共有し、教育する側の悩みや課題も話し合う機会となった。ICT教育が進む中で、学生の学びの現状がどのように変化しているのか、また身体に与える状況はどうなっているのかについて、学習会「子どもの成長・発達とICT教育」（講師：大阪教育文化センター代表 山口隆氏）を開催し、日本での教育の実態、今の学生たちをどうとらえるか等について意見交換を行った。その後の教務会議でも、新年度を迎えるにあたり、学生の自主的な学びをどう引き出すか等について継続的に議論を行った。 経営的な観点では、入学者が40名定員に対して21名となったこともあり、大きく減収している。大阪府看護師養成施設運営補助金、設置主体法人、大阪民医連からの運営補助金を引き続き受けつつ、2025年度は受験者・入学者の増加をめざし推薦入試の実施を主軸とし、宣伝・訪問活動を積極的に行い、多くの学生の確保に努めたい。	
入学	進路相談会は、15会場（高校含む）の進路相談会に参加し、大阪府下の全高校に学校案内パンフレットおよび募集要項の郵送を実施した。高校訪問も行っており、直接高校の進路指導の教諭と話すことが出来、入試情報やオープンキャンパス情報、本校の教育、2024年度から導入した公募推薦入試についても伝えることができた。訪問や進路相談に参加した学校から高校生がオープンキャンパスに参加しており、今後も高校の先生とのつながりを大事にしていきたい。 病院の看護学生担当者や共同組織の方とともに高校訪問等を行うことは今後の検討課題である。 また、オープンキャンパスも時期を早めて5月から開始し、1回の人数を30人定員とし午前・午後の2部制で5日間で実施した。保護者の参加も再開し、全体の参加者数は118名（保護者除いて）であり昨年度より39名増加した。オープンキャンパスの参加者は訪問をした高校からの参加者が多かった印象であり、開催時期を早めたことも参加者の増加につながったと考えられる。 進路相談会や高校訪問、オープンキャンパス参加者が受験につながっており、受験者数は64名と前年度より31名増加した。今年度から公募推薦入試を開始（10月に入試）したことで受験生確保につながったと考えられる。 （入学選考の可否は入学選考基準により適正に審査されている。） 今後も看護系大学が増える中、少子化により看護師を目指す若者が減少することが予測され、受験者を確保するためにもホームページやSNSの活用等、広報活動の工夫が必要と考える。	* オープンキャンパスの重要性に鑑みて4月実施の検討も必要
卒業・就職・進学	設置主体法人をはじめ関連施設との奨学生制度があり、1年次から奨学生となっている学生も多く見られるが、今年度の民医連施設への就職率は35%であった。関連施設外も含め就職率は100%である。 2024年度の本校の看護師国家試験合格率は94.1%であった。卒業生34名のうち、病院への就職が31名、1名が大学進学（保健師）となった。2名は次年度の国家試験に向けて準備を始めている。今後も学生の主体性を育みながら、教員一同、学生をサポートしていく。	* 卒業後の再受験の支援については大変評価できる

地域社会/国際交流	2024年6月浜寺校区防災訓練へ学生3名、教員5名が参加した。当日は子どもから大人まで地域の多くの方が参加され、BLS（一次救命処置）や包帯法など学習した知識をもとに手当ての方法などを実際に行った。 参加した学生から「地域の人と一緒に学ぶ事ができ、楽しかった」という感想が出され、日頃から防災意識を高めることの大切さを感じた。 7月2回生が「災害看護」の授業の一環で、大阪市立阿倍野防災センターへ行き学びを深めた。南海トラフ巨大地震をはじめとした大きな地震や災害が発生した場合に対する、日頃からの備えや救助支援について学ぶ機会となった。 本校は年1回の避難訓練を実施しており、2025年度は消防署職員に参加していただき、学生と教職員の避難訓練を実施した。 国際交流活動の一環として、平和を願い平和行進の医療班として教員が参加した。 8月は原水禁、被爆写真のパネルを展示し、被爆体験の事実を伝えるための取り組みを行った。学生は展示を興味深く見ており、原爆を知らない若い看護学生たちに戦争と平和の大切さを伝えることができた。 国際看護として講義の中で国際的に活動している看護師を取り上げ、YouTube動画も利用し、海外の医療・看護について学習した。また今年も映画シッコを視聴し、学生は各国の医療状況や医療保険制度について興味関心を寄せていた。日本の皆保険制度の重要性について改めて実感する学生が少なかった。 また、新型コロナ感染症だけでなく、世界の感染性疾患についても講義で深め、さらに講義や国家試験対策として教科書及び国民衛生の動向を用いて、日本の医療情勢や公衆衛生状況等を、統計をもとに学習を深めた。今年度の国家試験においても、こうした統計から出題されており、日本のこと、さらに視野を広げ世界にも目を向けることの重要性を再確認した。	* 校区防災訓練への学生の参加が地域とのつながりの重要性からももっと多いとよいのではないかと。参加者を増やす努力を
研究	教職員は、セミナーや研修会、看護協会や看護学校協議会の講演会、民医連主催の研修会等、延べ50名が参加することができた。また、6名の教員が研究発表を行った。 2024年度も、大阪府看護協会主催の看護教員養成講習会の講師として1名参加し、同講習会の実習地として今年度も2名の受講生を受け入れた。 また、2024年度は新たに、大阪府看護協会主催の臨床実習指導者講習会の講師として1名参加、指導補助者（プロンプター）としても前年に引き続き1名参加した。 こうした講習会への参加によって、今の教育について学ぶ機会にもなり、また他校の看護教員との交流も深まり、教員自身の資質向上にもつながると考える。	